

2024年5月19日（聖霊降臨日、B年）

牧師メッセージ

「共に歩む者として」

（ヨハネによる福音書 15:26-27, 16:4b-15）

司祭ヨセフ太田信三

わたしが在学当時の聖公会神学院では、神学生全員が霊的同伴者と共に歩むことが求められました。チャプレンと相談し、霊的同伴者が決まります。それから定期的に霊的同伴者と伴に祈り、語り合う中で、自分の霊的状态を見つめます。霊的同伴者の存在は、自分のために祈ってくれる人がいること、また自分も相手のために祈ることができることの大切さを教えてくれました。

創世記で神は「人が一人にいるのは良くない」とはっきり言っています。嬉しい時には一緒に喜び、悲しい時には一緒に悲しみ、悩みある時には一緒に悩み、片方が道を外れそうなら必死で止める。何よりも、いつも祈り合う相手がいる。そういう相手を通して、一人ひとりの命を大切にくださる神の思いを知ることができます。イエスが弟子たちを二人一組で派遣されたこと、パウロがいつも誰かと旅を伴にしたこと、これらには大きな意味があるのです。

今日の福音書で聖霊は「弁護者」と言われています。「弁護者」と訳されている単語は、「パラクレートス」というギリシャ語です。前置詞パラ「わきに、傍らに」とカレオー「呼び寄せる、励ます、慰める」から派生した名詞です。聖霊とは、人間が右に行けば右に、左に行けば左に並走し、時に慰め、時に励ましてくださる存在だということです。それは、神のわたしたちへの思いそのものです。「人が一人にいるのは良くない」と言い、一人ひとりの命を大切にくださる神は、一人の人間の歩みに寄り添ってくださるのです。弟子たちは、この聖霊が伴にいたから、弱く、孤独でありながらも、世界に出かけて行き、宣教の働きを担うことができました。

聖霊は時に、人を通して働くと言われます。クリスチャンはこの世において、聖霊の働きを誰かに伝える役割を担う者でもあるのです。それゆえ教会では、堅信式という聖霊をいただく特別な祈りを大切にしています。聖霊をいただいているクリスチャンは、この世で誰かに神の思い＝聖霊を届ける霊的同伴者として召されています。霊的同伴者は一方的に与える存在でなく、同伴者自身もまた、相手との交わりの中で誰かが伴にいてくれることの喜びを知るのです。つまり、クリスチャンの喜びは聖霊によって誰かと共に歩む道にこそあるのです。

人が一人にいるのは良くない。わたしたち一人ひとりが聖霊に助けられ、誰かの同伴者として歩むことができますように。そして、伴に喜び、伴に悲しむ歩みの中で、一人ひとりの命を大切にくださる神の思いを誰かに届けることができますように。